

事象投射理論による叙述類型に関する試論 —時間的限定性と属性叙述—

岩本 遠億

要旨

叙述類型における時間的限定句の共起制限を、事象投射理論によって明らかにした。従来、属性叙述は時間的限定と相容れないと考えられてきたが、例外が存在する。事象投射理論における時間構造をアスペクトと関わる内的時間、時制と関わる外的時間とに区別した上で、時間的限定がどちらにどのように行われるかを分析した。その結果、[1] 内的時間を持たない事象投射構造は、外的時間構造の如何に関わらず時間限定を受けない属性叙述となること、[2] 外的時間がない属性叙述であっても、内的時間が周期的、反復的構造として定義されるものは、時間的限定が可能となることが明らかになった。

キーワード：叙述類型、事象投射理論、時間的限定性、属性、アスペクト

1. 時間的限定性と叙述類型に関する問題

本稿は、叙述類型についての知見をもとに、事象投射理論に修正を加え、さらに修正された事象投射理論によって、叙述類型を定義しようとする試みである。叙述類型には主語、時制、アスペクト、述語タイプなどの要因が関わるということが知られているが（益岡1987, 2000, 2004, 影山2008, 2009, 真野2008など）、ここでは特にアスペクトに焦点を当て、属性叙述と時間的限定性がどのように概念的に表示されるか考察したい。

影山（2008）は、叙述類型を時間的修飾要素との共起制約によって分類し、開始・終了の時間を明示できるものを事象叙述、それができないものを属性叙述としている。さらに属性叙述のうち「ふだんは」と共起できるものを準属性

叙述と下位分類している。表1のとおりである。

表1 影山 (2008) による叙述のタイプ

叙述の タイプ	事象叙述 開始・終了の時間を明示できる		属性叙述 開始・終了の時間を明確にできない ¹	
	出来事	状態	準属性	(内在的) 属性
例示	彼は2003年に大学を卒業した。 彼女は5年間その会社で働いた。	彼は1997年から2005年まで学生／高校教師／弁護士だった。 彼は学生／高校教師／弁護士をしていた。 彼は病気だ／裸足だ。	彼は(ふだんは)愛想がよい。 彼は(ふだんは)善人だが…。 うちの息子はよい子です。	彼は(*ふだんは)長身だ。彼は天然ボケだ。ゾウは鼻が長い。
事象項	e (event)	e (event)	e [^]	p (property)

(影山2008:27より関連部分だけを引用)

時間軸上に展開する事象は開始・終了の時間を明示することができるが、時間軸上に位置づけられない属性には、開始や終了といった時間的限定を行うことはできないという影山の議論は妥当なものである。しかし、開始・終了という時間限定は、必ずしも時間軸上に行われるものばかりではない。例(1)を参照されたい。

- (1) a. この部屋は9時から11時まで日が当たる。
b. チューリップは4月から5月まで咲く。

(1)は、「9時から11時まで」「4月から5月まで」という開始と終了の時間が明示されているが、事象叙述ではなく、属性叙述となっている。一方、同じ「9時から11時まで」や「4月から5月まで」という時間限定を受けた以下の例文は、属性叙述ではなく、事象叙述となる。

- (2) a. この機器は、9時から11時までこの部屋にある。
b. 太郎は、4月から5月まで京都にいる。

また、(1)の時制を過去時制とした(3)や、特定の時間を指定した(4)も事象叙述となる。

- (3) a. この部屋は9時から11時まで日が当たった。
b. チューリップは4月から5月まで咲いた。
(4) a. この部屋は明日の9時から11時まで日が当たる。
b. チューリップは来月から再来月まで咲く。

(2)～(4)のように、開始・終了時点の明示されたものの多くは事象叙述となるが、もう一方で(1)のような属性叙述文も存在する。開始・終了時点の明示の可能性の有無という単純な基準では事象叙述と属性叙述を区別することはできないため、開始・終了の時間限定が叙述の中でどのように行われるかを明らかにする必要がある。

さらにもう一步進んで注意しなければならないことがある。それは、総称時制ではなく過去時制を用いた文でも、開始・終了時点を示すことができないものが存在することである。以下を参照されたい。

- (5) a. この机は木製だ。
b. *この机は1月から3月まで木製だ。
(6) a. あの机は木製だった。
b. *あの机は1月から3月まで木製だった。

これらの文では時制の種類に関わりなく開始・終了時点を示すことができない。時制の種類によって時間的限定の可否が左右される以下のような文と対照的である。

- (7) a. 太郎は背が高い

- b. *太郎は1年生から3年生まで背が高い
- (8)
- a. 太郎は背が高かった
 - b. 太郎は1年生から3年生まで背が高かった

以上のように、開始・終了時点共起の可否は、時制や属性の種類によって条件づけられていることが示唆される。これは、叙述が持つアスペクト構造と密接な関係があるに違いない。本稿では、事象のアスペクト特徴を事象投射という概念で定義する事象投射理論を用いて、上で見た叙述の類型と開始・終了時点の共起関係がどのように捉えられるか考察することにする。

2. 事象投射構造の構成要素

この節では、叙述類型と関連のある部分に焦点を当てて事象投射理論を説明する。

Jackendoff (1996) は、事象の限界性や計測現象を取り扱うためには、主題、経路、時間との間に相同的対応関係を明示できる構造を定義しなければならないと考えた。均質的、連続的動きを表す事象においては、時間と経路の距離との関係は正比例し、一方が限界づけられる時、他方も限界づけられるからである。Jackendoff (1996) は、物体、経路、時間を概念的に定義する基盤を Marr (1982) の3Dモデルに求めた。物体の幾何学的特性は、断面を軸によって投射して定義する一般柱体の組み合わせによって表示されるというのが Marr (1982) の3Dモデルである。一般柱体が断面と軸との組み合わせによって定義されるように、幅を捨象した経路や時間も、0次元の断面を1次元的に投射することによって定義される。これらの間の比例関係は、投射軸の間に構造保持束縛関係があることを示せば良い²。

以下、Jackendoff (1996) による構造保持束縛構造の概要を紹介したのち、その問題点を明らかにして、時間構造をどのように取り込むべきか考察する。Jackendoff によると、均質的、連続的動きは、位置的状态の1次元の投射によって定義されるが、位置的状态が持つ概念構造は以下のように想定されている。

(9) 位置的状态 (物体 x が時間 T において、空間 P に存在する)

[BE ([Thing x], [Space P]); [Time T]]

例えば、「太郎が部屋に午後3時にいた」という文の概念構造は以下のようになる。

(10) 太郎が部屋に午後3時にいた

[BE ([Thing TARO], [Space INSIDE ([ROOM]])]; [Time 3:00 p.m.]]

1996年当時 Jackendoff が前提としていた概念構造では、存在関数 BE は、主題と場所のみを項とし、時間はあくまでも修飾要素とされていた。項の外にセミコロンが置かれているのは時間が修飾要素であることを表したものである。Jackendoff (1996) は、位置的状态を表すこの構造を基礎に均質的連続的動きを定義することを提案している。均質的連続的動きは、移動の様態を捨象すれば、 X が t_i 時に l_i に存在するという位置的状态が、 t_j 時には l_j に、 t_n 時には l_n にといったように実数上に順序づけられた無限の位置的状态の連続と捉えられる。それを直感的に表すと (11) のようになるだろう。

(11) $\rightarrow X$ の連続的動き

$X \quad X \quad X \quad X$ (=物体)

$l_1 \quad l_2 \quad \dots \quad l_{k-1} \quad l_k$ (=位置)

$t_1 \quad t_2 \quad \dots \quad t_{k-1} \quad t_k$ (=時間)

各々の位置的状态は、「動き」の0次元的な断面を構成する。それぞれの断面における時間の次元性は0次元、同様に空間の断面も0次元である。従って、均質的連続的動きの断面は以下のようになる。

(12) 推進の断面

[BE ([Thing X], [Space 0d]); [Time 0d]]

均質的連続的動きは、時間の経過と相同的に空間が1次元、連続的、非有界的に伸長する事象である。時間項と空間項との間に相同的関係が成立することが関数に付与されたギリシャ文字（ここでは α ）によって示されている。このような相同的関係を構造的に表示したものを構造保持束縛と呼ぶ (Jackendoff 1996)。

(13) 均質的連続的動き（「歩く」「流れる」など）

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & [1d]^\alpha & [1d]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ 0d & & \\ \text{Sit BE} ([\text{Thing X}], [\text{Space 0d}]); [\text{Time 0d}] & & \end{array} \right] \begin{array}{l} [\text{sp - bound axes}] \\ \\ [\text{cross - section}] \end{array}$$

このように、0次元の状態を1次元に投射することによって事態を定義しようとする Jackendoff (1996) の試みは、逆に事態から状態への変換の可能性を示唆するもので、状態化の類型論へと繋がる重要な提案であった (岩本2008, 2010, 2011)。

しかし、岩本 (2008) が指摘したように、Jackendoff のこの構造保持束縛構造には入力、出力、関数の関係が明示されていないという問題のほかに、事象を時間軸上に位置付ける外的時間と事象内部の時間構造との混同が見られるという問題があった。例えば、前出の「太郎が部屋に午後3時にいた」は、状態を表すという点において、内的時間構造は0次元であり、その状態が成立したことを表す外的時間は「午後3時」なのである。二つの時間関係を表示するためには、(10) は以下のように修正されなければならない。

(14) 太郎が部屋に午後3時にいた (修正版)

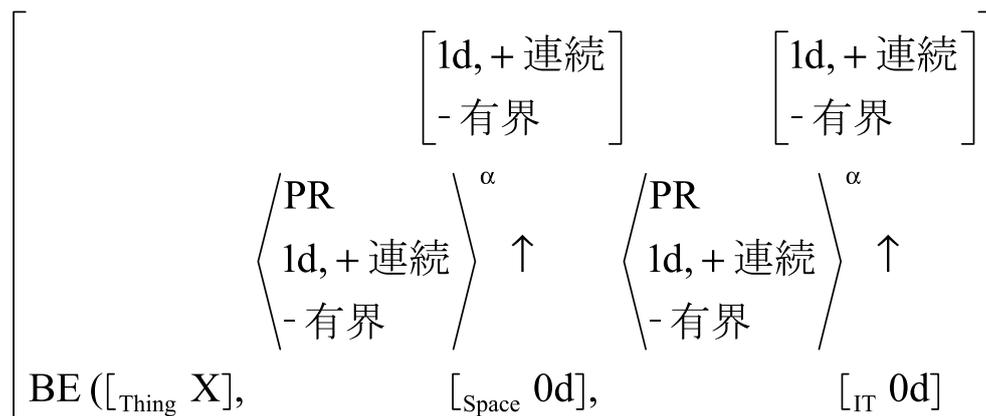
[[BE ([Thing TARO], [Space INSIDE ([ROOM]]), [IT 0d]); [ET 3:00 p.m.]]

IT は Internal Time (内的時間)、ET は External Time (外的時間) の略である。内的時間は、存在関数の 0 次元性と不可分に結びついたものであるため、修飾ではなく項として扱われるべきである。ここでは BE を主題、空間、内的時間の 3 項をとる関数として捉える³。一方外的時間は、時制と結びついたものであり、事象を時間軸上に位置付けるものである。

このように、内的時間と外的時間を概念構造上区別することは、事象類型を論じる上で有用な手掛かりとなる。前述のように、状態と属性は、時間的限定を許容するか否かによって区別されると指摘されているが、内的時間と外的時間の何れの限定が許されないのか。また、属性はどのような時間構造を持つのか、あるいは持たないのか。二つの時間を事象投射構造に組み入れることによって、これらの疑問にアプローチすることができるようになるのである。

状態と属性についての議論に進む前に、状態を投射して定義される事態の事象投射構造とそれに関わる関数や相強制について述べておきたい。岩本(2008, 2011) は、入力、出力、関数の関係を明示化するために、Jackendoff (1996) の構造保持束縛構造を以下のように修正した。

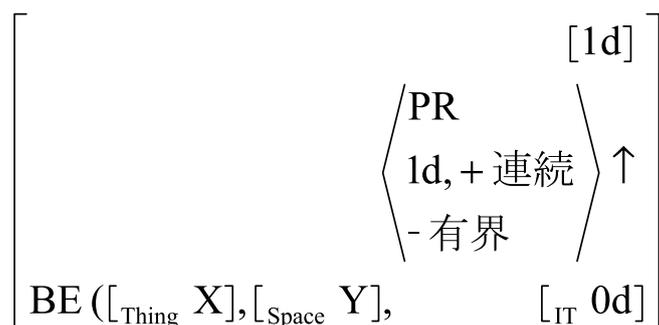
(15) 「均質的連続的動き」(「歩く」「流れる」) の事象投射構造



「 $\langle \rangle \uparrow$ 」は関数を表し、 \uparrow の下が入力、上が出力である。 $\langle \rangle$ の中は関数の種類とその素性を示す。PR は投射関数、「1d, +連続, -有界」はこの投射関数の素性である。0d をこの関数で投射すると [1d, +連続, -有界] 実体が出力として定義される。均質的連続的動きの場合、空間と内的時間の断面は共

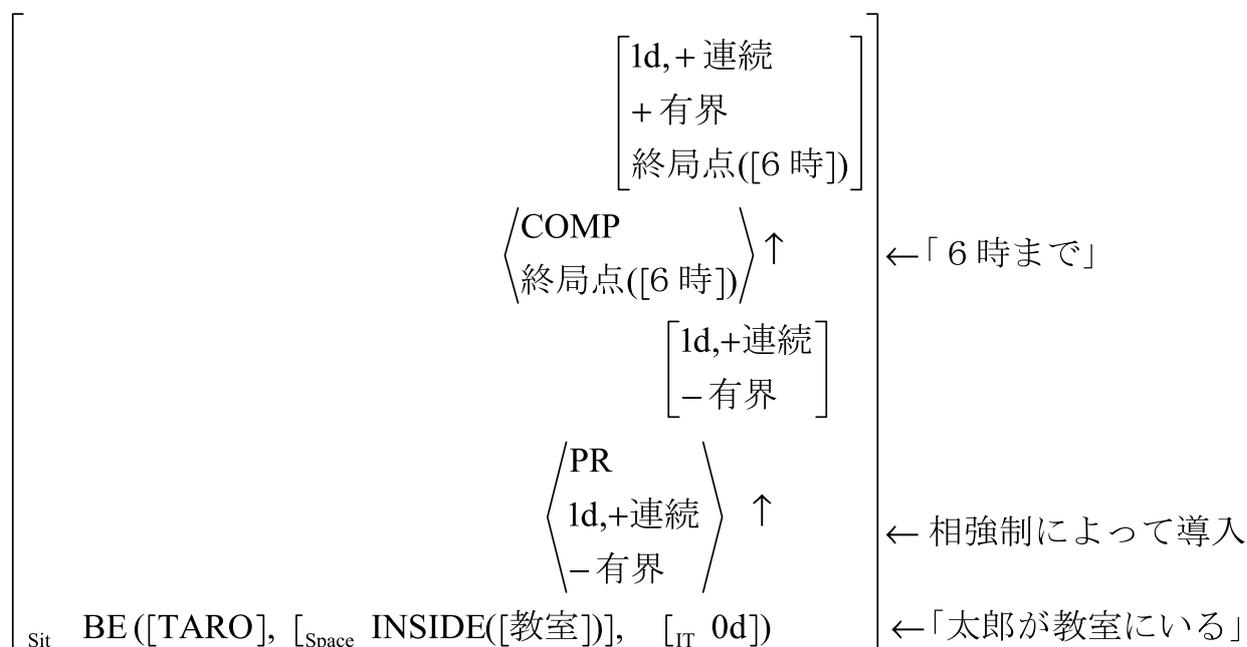
に0dであり、両者が同じ関数によって相同的に [1d, +連続, -有界] に変換される⁴。一方、内的時間だけが投射する「滞留」の構造は以下ようになる。

(16) 「滞留」の事象投射構造



次に相強制について述べる。相強制とは、述語が元来持っているアスペクト特性が修飾要素によって強制的に変更される現象である。例えば、「太郎は教室にいた」という文では、太郎が特定の時間的一点において教室にいるという状況が成立すれば良い。そのような意味において存在的状態は0次元の特徴を持つ (Vendler 1967, Verkuyl 1993, Jackendoff 1996, 岩本2008, 2011)⁵。ところが、「太郎は6時まで教室にいた」においては、「いる」という点的状態が継続的状态に変更されている。それは、「6時まで」が含む限界化関数<COMP|終局点 ([6時])>が連続的時間を入力として要求するからである。「いる」と「6時まで」との単一化のためには、<PR|1d, +連続, -限界>が強制的に導入されなければならない。以下の構造に示すとおりである。

(17)



状態、あるいは属性が時間的限定句と共起する場合、この相強制が行われている。これはその状態／属性が内的時間を項としていることを意味する。一方、それらが時間的限定を受け入れない場合、それらは内的時間そのものを項としていないと考えなければならない。もし、それらが $[\text{IT } 0d]$ を含んでいるなら、(17) と同様の投射構造を定義することができてしまうからである。この場合、内的時間限定の可否が内的時間の有無と対応するのである。また、外的時間は過去時制と非過去時制（現在と未来）だけに言及するものである。従って、総称時制は外的時間を持たないということになる。

このような事象投射理論の枠組みで、叙述類型に関わる時間限定がどのように記述説明されるか以下に見て行くことにしよう。

3. 時間的限定性の決定要因

まず、外的時間と内的時間の関係を整理しておく。上で述べたように、これらは任意の概念要素である。従って、それらの有無によって次の4つの組み合わせが定義される。

- (i) [+ 内的時間] [+ 外的時間]
- (ii) [+ 内的時間] [- 外的時間]
- (iii) [- 内的時間] [+ 外的時間]
- (iv) [- 内的時間] [- 外的時間]

値がマイナスであるということは、当該の時間構造そのものを持たないということであるので、開始・終了時点を含め、どのようなタイプの時間限定も不可能である。従って、(iv) は如何なる形の時間限定も受け入れない。

(18) [- 内的時間] [- 外的時間]

- a. *あの机は1月から3月まで木製だ
- b. *象は2000年から2100年まで鼻が長い
- c. *太郎は今日花子の実の息子だ

(ii) と (iii) では現れている時間限定表現は値がプラスのものとのみ結びつくので、修飾されているものが内的時間か外的時間か一義的に決定される。(ii)、(iii) の例は以下のとおり。

(19) [+ 内的時間] [- 外的時間]

- a. この部屋は9時から11時まで日が当たる
- b. 地球は、365日で太陽を一周する
- c. チューリップは4月から5月まで咲く

(20) [- 内的時間] [+ 外的時間]

- a. *あの机は1月から3月まで木製だった
- b. *象は1000年から1500年まで鼻が長かった
- c. *太郎は去年一年間花子の実の息子だった

(19) と (20) の対比に、内的時間と外的時間の非対称性が表されている。内的時間限定は外的時間なしに可能だが、外的時間限定は内的時間の存在を前提とする。すぐ下に見るように、外的時間限定は内的時間の中に取り込まれる。内的時間がなければ、外的時間限定をそこに取り込むことができないのである。

(i) の場合を見よう。これには内的時間、外的時間の双方が含まれるので、時間的限定が双方に行われる場合と一方に行われる場合に大別される。さらに後者は論理的には二つのうちの何れかを限定することになるので、さらに二つの場合に分けられることになる筈であるが、実際には外的時間限定は内的時間限定と一致する。

(21) [+内的時間] [+外的時間] [1] 時間的限定が双方に行われる場合

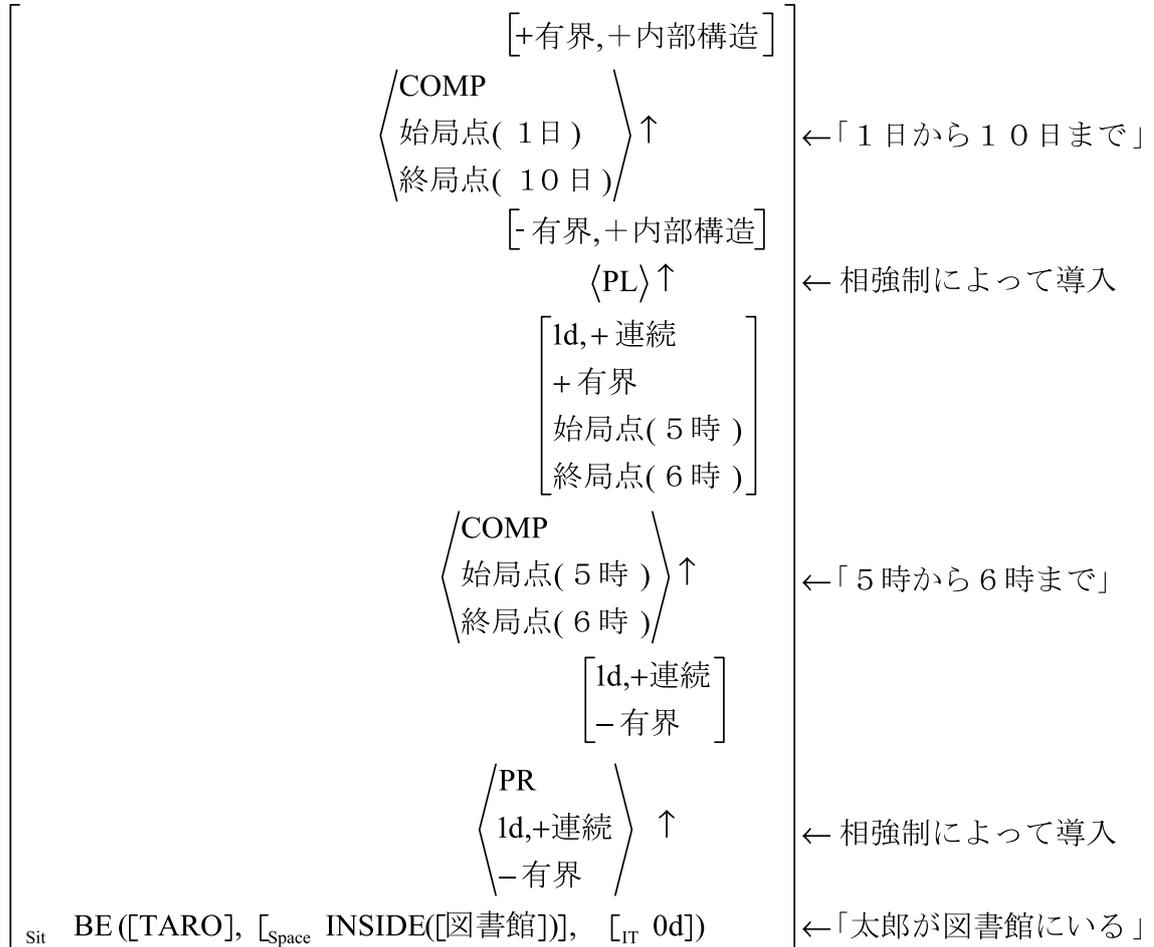
- a. 太郎は1日から10日まで図書館に5時から7時までいた
- b. 花子は去年1年間、夜8時から12時まで勉強した。
- c. 1985年から2000年まで、花子は10時から12時まで太郎の助手／
*妻だった。

(22) [+内的時間] [+外的時間] [2] 外的時間限定＝内的時間限定

- a. 太郎は1日から10日まで図書館にいた (外的時間＝内的時間)
- b. 花子は1年生から3年生まで背が低かった (外的時間＝内的時間)
- c. 花子は1985年から2000年まで太郎の妻だった (外的時間＝内的時間)

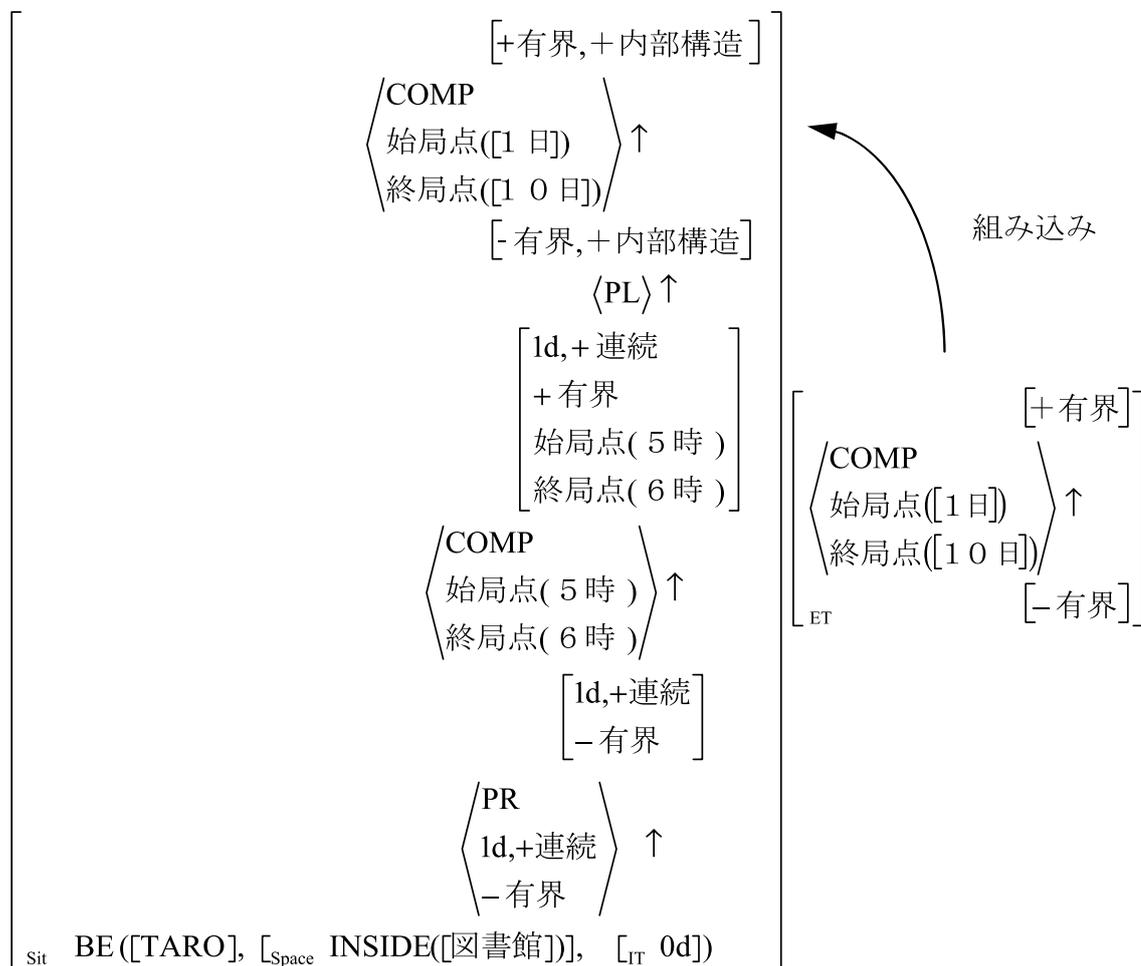
(21) には二重の時間限定が含まれる。内的時間限定によって限界化されたものを、さらに大きな時間幅を持つ外的時間に位置付けるため、反復解釈が与えられる。このことは、内的時間限定と外的時間限定が何らかの方法で単一化されていることを示唆する。岩本(2008)による反復の事象投射構造を(21a)に適用すると、(23)のようになる。なお、〈PL〉は複数化関数、[±内部構造]はある実体が複数の限界実体によって構成されているか否かを表す素性である⁶。

(23) 太郎は1日から10日まで図書館に5時から7時までいた



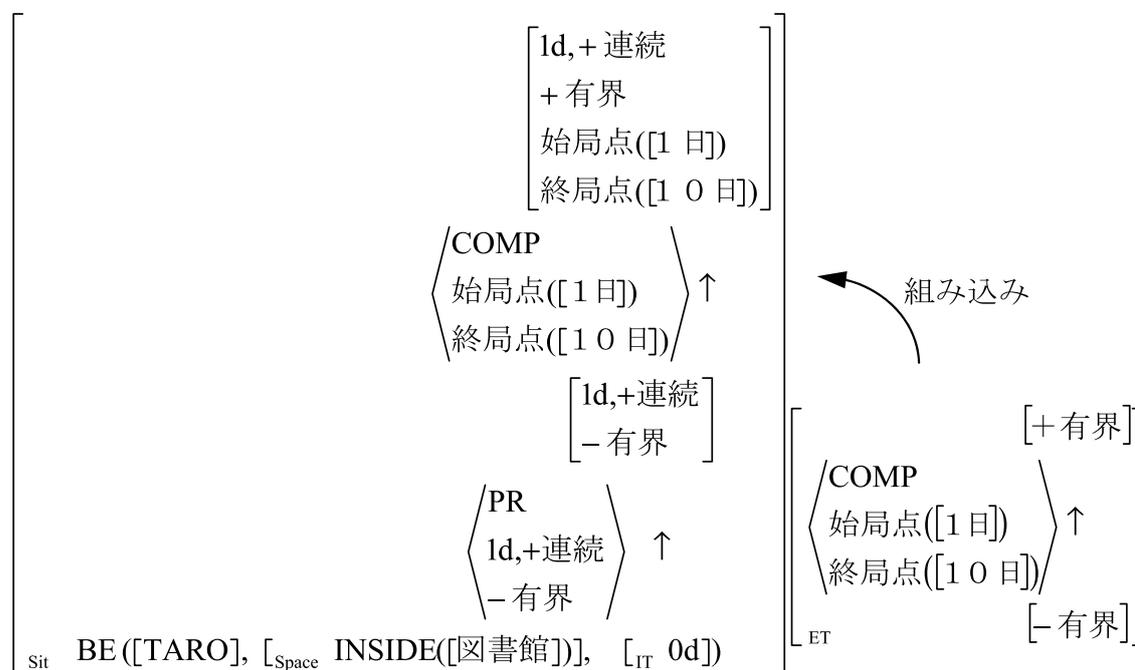
反復性解釈は、一つの有界的時間構造の複数化によって生み出されるものである。二重の時間限定が一つの事象投射構造の中に単一化されることによって、複数化構造が定義されている。先に内的時間と外的時間を構造的に区別し、(14)のように提案した。それを(23)に適用すると、(24)のようになる。

(24)



この構造は、外的時間限定が内的時間に組み入れられることによって複数性解釈が与えられることを示している。このように、二つの時間限定が一つの投射構造の中に組み込まれることは、(22)のように外的時間限定が内的時間限定と一致する現象に対する説明となっている。(22a)の「1日から10日まで」は、時間軸上の時間に言及するものなので外的時間限定である。(22a,b)も同様である。しかし、これには反復解釈はなく、その期間連続的に太郎が図書館にいたということを意味している。外的時間限定が内的時間に組み入れられているのである。

(25)



以上、内的時間と外的時間の区別、それぞれの有無、外的時間限定の内的時間への組み込みという事象投射理論における時間構造の扱いを整理してきた。これにより、開始・終了時点の明示化の可否は内的時間の有無によって条件づけられていることが明らかになった。総称時制を用いた属性叙述であっても、内的時間のあるものは開始・終了時点を含む時間限定が可能である。この分析は、影山(2008)が見落としていた事実を理論的にどこに位置付けるかということについても、一定の役割を果たすものと思われる。

だが、これまでに指摘されている事実の中で、内的時間と外的時間の区別だけでは説明のつかないものがある。次の例を参照されたい。

- (26) a. *花子は1年間天然ボケだ。
 b. *花子は3年間背が低い。 (影山2008)

時間的限定性を基準にする分類(益岡2000、影山2008など)によると、時間的限定が不可能なこれらの文は属性叙述ということなる。ところが、内的時間

と外的時間を区別する本理論においては、これらを簡単に属性叙述と片付けることはできない。外的時間を過去時制にした場合、時間的限定が可能になるからである。

- (27) a. 花子は中学2年生から高校1年生まで天然ボケだった。
b. 花子は1年生から3年生まで背が低かった。

先に見たように、外的時間限定は、内的時間に取り込まれるが、それが可能なのは内的時間が存在する場合のみである。(20)が不適格なのは、これらの事象投射構造が内的時間を持たないため、外的時間限定をそのなかに取り込むことができないからであった。すると、(27)の適格性は、これらの述語の事象投射構造が内的時間を内包していることを意味することになる。(19)のように [+内的時間] [-外的時間] の組み合わせは可能なので、(26)の不適格性については別途説明が必要になるのである。

(26)の不適格性の原因にアプローチするために、(19)との解釈の違いに注目してみよう。(19)を以下に再掲する。

- (19) a. この部屋は9時から11時まで日が当たる。
b. 地球は、365日で太陽を一周する。
c. チューリップは4月から5月まで咲く。

これらの文に共通する解釈的特徴は、反復性である。(19a)が意味するのは、「この部屋は（曇っていなければ）毎日9時から11時まで日が当たる」ということである。(19b,c)には「毎年」の含意がある。一方、(26)にはそのような反復性の含意がない。人の性格や身長は、長期間にわたる変化を経るものであるが、周期的に変化するものではない。一方、日照や地球の公転、花の開花は、周期的（反復的）特徴を持っている。このような特徴は、それぞれの語のクオリア構造（Pustejovsky 1995, 小野2005, 影山2005, 2008）の中に記載されており、文中で他の要素との単一化が行われる時に呼び起こされ、文全体の意味解釈の中に表示されることになる（共合成 co-composition, Pustejovsky

1995)。共合成によって反復性が与えられる事象投射構造だけが内的時間を限定することができる。反復性のない時間限定は、一回限りのものであり、外的時間と結びつかなければならないが、(26)は外的時間を持たない。そのため解釈不能となって不適格となるのである。

影山(2008)は、属性叙述の中に「ふだんは」という時間的修飾が可能なものがあることを指摘し、それを「準属性」と呼んでいる。「ふだんは」とはそうでない特徴が時々、すなわち散発的に現れることを意味するもので、ここにも反復性の含意がある。「ふだんは」が反復的意味を文の中に供給しているのである。このように考えると、影山の「準属性」は、我々の[+内的時間][−外的時間]に対応するということになるだろう。

4. 結論

叙述類型において属性が持つアスペクト的特徴を事象投射理論を用いて分析した。事象アスペクト内部の時間構造を表示する内的時間と、時制と結びつく外的時間を区別することにより、時間的限定句がこれらのうちどちらと単一化されるのかを明示することができるようになった。その結果、以下のことが明らかになった。

- [1] 内的時間を含まない事象投射構造は、外的時間の如何に関わらず時間的限定を受けることはできない。
- [2] 内的時間を含むが外的時間を含まない事象投射構造は、反復的解釈が項や付加詞のクオリア構造から供給される時のみ時間的限定が可能となる。
- [3] 内的時間と外的時間の双方が含まれる時、外的時間の限定要素は内的時間の中に組み込まれる。

さらに、内的時間と外的時間の組み合わせは、影山(2008)の事象叙述、準属性叙述、属性叙述に対して原理的な定義を与えることに成功したと言えるだろう。以下に両者の対照を示す。なお、影山の論考には、本研究で明らかになった組み合わせ[−内的時間][+外的時間]に対応するものは見受けられない。

	時間的限定可 無条件	時間的限定可 反復の含意	時間的限定不可	
	本研究	+内的時間 +外的時間	+内的時間 -外的時間	-内的時間 +外的時間
影山 (2008)	事象叙述	準属性叙述	?	属性叙述

事象投射理論の特徴は、従来の叙述類型論で用いられてきた言葉による説明に代わり、時空間、物体、およびその数性を定義する物理、数学的な概念をもって現象に対する原理的説明を行おうとするところにある。本稿では、内的時間や外的時間の有無をどのように条件づけるかという問題には踏み込めなかったが、語のクオリア構造から得られる情報がここで明らかになった分類基準を派生するような形式化が可能になるのではないかと予測する。別稿を立てて考察したい。

注

- ¹ 事象叙述の特徴に合わせ「明示できない」とすべきと考えられるが、影山の記述をそのまま引用した。
- ² Jackendoff (1996) や岩本 (2008) は構造保持束縛を明示的には定義していない。その一つの方法として、モデル理論を使った Krifka (1998) がある。
- ³ 岩本 (2008) では、Jackendoff (1996) の問題に気がついてはいたが、内的時間を BE の項として表記するまでの変更を行わず、不十分であった。岩本 (2011) を参照のこと。
- ⁴ 変化は非連続的投射によって定義されることになるが、本稿での議論に直接かわらないので、説明は割愛する。興味のある読者は岩本 (2008, 2010, 2011) を参照されたい。
- ⁵ 状態を継続的特徴と捉える研究者もいる。Carlson (1981), Galton (1984), Kearns (2000), McDonald (2008) などを参照のこと。
- ⁶ 「反復」の事象投射構造の詳細については岩本 (2008) を参照のこと。

参照文献

- Carlson, Lauri (1981) Aspect and quantification. In P.J. Tedeschi and A. Zaenen (eds.) *Syntax and semantics 14; Tense and aspect*. New York: Academic Press, pp.31-64.
- Galton, Anthony (1984) *The logic of aspect: an axiomatic approach*. Oxford: Clarendon Press.
- Henrichs, Erhard (1986) Temporal anaphora in discourses of English. *Linguistics and Philosophy* 9:63-82.
- 岩本遠億 (2008) 『事象アスペクト論』 開拓社.
- 岩本遠億 (2010) 「経路移動事象の両義的限界性と増分性」『レキシコンフォーラム』 No.5, 53-98, ひつじ書房.
- 岩本遠億 (2011) 「シテイルが持つ継続的状态性と結果の意味—井上和子『変形文法と日本語』と事象投射理論—」長谷川信子 (編) (近刊) 『70年代生成文法再認識』 開拓社.
- Jackendoff, Ray (1996) The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14: 305-354.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館書店.
- 影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No. 1』65-101. ひつじ書房.
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 pp.21-43. くろしお出版.
- Kearns, Kate (2000) *Semantics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Krifka, Manfred (1998) The origins of telicity. In Suzan Rothstein ed. *Events and grammar*, pp. 197-235. Dordrecht: Kluwer.
- Marr, David (1982) *Vision*. Freeman: San Francisco.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 「属性叙述と事象叙述」益岡隆志 (編) 『日本語文法の諸相』 pp.39-53, くろしお出版.
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の種類の観点から—」益岡隆志 (編) 『主題の対照』 pp.3-17, くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 p.3-18, くろしお出版.
- 真野美穂 (2008) 「状態述語文の時間性と叙述の類型」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 p.67-91, くろしお出版.
- McDonald, Jonathan (2008) *The syntax of inner aspect*. Amsterdam: John Benjamins.
- Mourelatos, Alexander P. D. (1978) Events, processes and states. *Linguistics and Philosophy* 2:415-434.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』 くろしお出版.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in philosophy*. Cornell Univ. Press

Verkuyl, Henk (1993) *A theory of aspectuality-the interaction between temporal and atemporal structure*. Cambridge: Cambridge University Press.